

伏見康治著作集

報 月
(8)
第 8 卷
1988・3

わが友伏見さん

永宮健夫

伏見さんとは東大物理の同級生である。学生の頃、授業時間には、伏見さんはワラ半紙をひろげて一時間に一、二枚、何やら式を写しとって、その間を簡単なドイツ語でつないでいた。そのくせ何でもよく理解し知っているのは驚異、脅威であった。三年生のときは理論志望の仲間になり、クラン・ヒルバートの論議をしたが、研究問題（当時は理論演習といったものだが）は別であった。私は一高仲間と親しくし、伏見さんは東高仲間と親しかったので、私と伏見さんの間はそんなに密ではなかった。

わが友伏見さん……………永宮健夫…1
今昔物語……………大塚益比古…3
月落ち鳥啼き……………平尾泰男…6

みすず書房
東京都文京区
本郷 3-17-15

は、友近先生の京大転任に伴って昭和十八年に教授になった。なお私たちの卒業は昭和八年である。

友近教授は流体力学の専門家であったが、私は勝手に物性理論を手がけた。またよく菊池研究室のコロキウムに参加した。伏見さんは、はじめ、形式上は岡谷辰治教授所属の講師であったと思うが、そのころは実質は菊池研に属していた。この菊池研には、私が移った当時、湯川秀樹助教もおられ、坂田昌一さんも助手か何かでおられ、他に小林稔さん、武谷三男氏、渡瀬譲、伊藤順吉、山口省太郎各氏、その他がおられた。

伏見さんとの学問的交流（討論などの）はあまりなかったが、あるとき（昭和十七年？）物理談話会で伏見さんが液体ヘリウムの奇妙な性質の話をされた。私も興味をもっていて文献を集めていたので、少しあとの物理談話会で、液体ヘリウムの奇妙な性質のたいくわしい話をした。八木秀次先生が前席に坐っていて、熱心にきいて下さり、大変ほめて下さった（伏見さんの話のときよりも余計にほめられた）。伏見さんは物理学の基本に興味をもち、その論文は、数学的才能を発揮して、形式を重んじたものになっていると思う。学位論文となった「密度行列の一般論」は代表的な有名な作である。私の方は、具体論、実質論である。

上記の八木秀次先生は、当時の理学部長であったが、の

卒業してすぐ伏見さんは理学部助手になり、形式上は寺沢寛一先生に所属していたと思う。私は寺沢寛一先生の出店である工学部の数学力学研究室の助手に採用された。その主任助教授の山内恭彦先生は、東高で教えたことがあり、そのためか、伏見さんは時々現われて山内さんと話をした。また私とはパウリの相対論の本を論議した。理研の仁科コロキウムにも一緒に参加したが、伏見さんがベックのベータ崩壊の理論を巧みに紹介したことは忘れ難い。この理論はフェルミのベータ崩壊理論に先立つものであった。

一年して伏見さんは阪大物理の講師に移られた。私は三年して東高の先生になり、さらに三年して阪大物理の助教に移った。私が阪大に移ったのは、東大の理論演習のときの友近先生が私を呼んで下さったからである。友近先生は、伏見さんを阪大に呼ぶときにも積極的であったと後に私に話された。伏見さんは昭和十七年に教授になり、私

ち大政翼賛会に入られ、技術院総裁にもなられた。戦後のあるとき、理学部に來られて、大講義室で話をされたが、その話の中で次のようなことがあった。自分は才能豊かで、何でもできる。しかし、そのため、学問に専心することができなかった、と。

この話をときどき思い出して伏見さんに当てはめてみる。伏見さんは、あんなに才能豊かで、深い思慮のある人でありながら、全力をご自分の物理に投入されなかった。伏見さんは幅広い学識と才能を学問行政の方面に発揮され、また近年は参議院議員として活躍しておられる。そのことは結構なことであると思うのだが、私としては、伏見さんが学問自体の発展に、その能力を十分に注ぎ込むことをしなかったことが残念である。

阪大の初期の、まだ独身でおられた頃、YMCAに住んで風景画をかくておられた。そのころ豊中の私の家庭にお呼びして、泊って頂いた。奥さんがきまりかけていて、私の家内よりも一年下の同窓生であったからである。どうも余りよい批評をしなかったのが拙かったが、のち私の方からは家族ぐるみで伏見宅を訪ねる機会が二度くらいあり、奥さんとも仲よくなった。伏見さんにお嬢さんと坊ちゃんが出てきた頃までのことで、私の方には男の子が一人できていた。

戦争が進むにつれて、阪大物理の教授連には外部に出て仕事をやる人が多くなり、終りの頃は伏見さんと私の二人だけになってしまった。伏見さんは教室主任になり、私と二人が物理教室を支えた。戦後も協力し合うことが多かった。特に人事では意見が合うことが多かった。

昭和二十年代後期のことだったか、原子力開発の政府案が急に出てきて、伏見さんは急遽上京した。ちょうどそのとき伏見研究室所属の武内義尚君（現東北大学教授）の結婚式があり、私は伏見さんの代役として仲人をした。この武内君は、結婚の前だったか、勸起子の論文を作って私の所に相談にきて、私は討論するだけでなく、英文の大修正までして上げた。

伏見さんの第一のお弟子さんは内山龍雄君である。その一般ゲージ場理論（一九五六年）は、現代の素粒子論の基礎をなす大論文であるが、伏見さんはこれに余り関心を払わなかったようである。もっとも、私も、ごく最近までこれを知らなかった。むしろ伏見さんの関心は、庄司一郎君と一緒に研究した二次元イジング系の統計力学にあったようである。

長いおつき合いで、伏見さんの方からは私の学問に対していい点をつけていなかったと思うが、個人的には仲よくし、なつかしみ合う間柄である。私の方が、だいぶ才能に乏しく、余り話相手にもならないのであるが、それでも時

々手紙のやりとりをし、会えば話しをする間柄である。いつまでもの御健在を祈る。

（大阪大学名誉教授）